

## 令和7年度第2回大野城市芸術文化振興審議会会議録

日時:令和8年2月3日(火) 10:00~12:00

場所:市役所本館4階 全員協議会室

出席者:委員 安河内俊明会長、長津結一郎副会長、糸山裕子委員、中嶋真理子委員、永野薫子委員、松永雅子委員、小林京子委員、斎藤廣樹委員

事務局:岩下コミュニティ文化課長、荒牧コミュニティ文化課芸術文化担当係長、辰野主任主事、二本木(記録)

欠席:國分慎二委員

資料 【資料1】大野城市芸術文化振興プラン実施スケジュール(案)

【資料2】令和7年度実施内容について

【補足資料1】芸術文化情報サイト「ツナグト」について

【補足資料2】芸術文化ワークショップ体験講座について

【補足資料3】「おしゃべりワークショップ わたしが知ってる大野城のはなし 北地区の巻」

【補足資料4】ツナグトレポーター養成講座

【補足資料5】芸術文化に関する職員研修について

【補足資料6】令和7年度大野城心のふるさと館実施事業

【補足資料7】サイトを中心とした担い手と受け手をつなぐネットワークの構築

### 1 開会

### 2 審議事項

#### ① 大野城市芸術文化振興プラン実施スケジュール

【資料1】大野城市芸術文化振興プラン実施スケジュール(案)

**事務局**

事務局の説明の後、質疑。

⇒質疑、意見なし

【資料2】

**事務局**

事務局の説明の後、質疑。

⇒質疑、意見なし

#### ②令和7年度実施予定内容について

##### 1 知ろう(情報・理解)

【資料2】令和7年度実施予定内容について

【補足資料1】芸術文化情報サイト「ツナグト」について

**事務局**

事務局の説明の後、質疑。

⇒質疑、意見なし

##### 2 行こう(参加)

【資料2】令和7年度実施予定内容について

【補足資料2】

【補足資料3】

**事務局**

事務局の説明の後、質疑。

【質疑・意見】

**糸山委員**

補足資料2に「参加者自身に担い手という意識づけは難しいと感じている」と記載があるが、やっぱりいろんなワークショップをしても担い手という意識づけは難しい。やっていくうちに楽しいとか面白いとか回数が増えていくと、少しずつ自信がついて、自分でもやれるかもしれないな、と思う。担い手になるのは10人中1、2人というイメージでいいのではないかと思う。動き出すことが大事。運営側が担い手を作りたいという熱意があると、熱量が伝わる。やっていくしかないと思った。

**松永委員**

先日、小学校6年生がまどかぴあで狂言を鑑賞した。なかなかそういう鑑賞の経験や、家族で行くのも少ないだろうから鑑賞の機会をつくっていただくのはとてもありがたく、いい経験だった。ありがとうございました。

**長津委員**

この実行プランは「誰もが体験・鑑賞できる環境づくり」とか「機会をつくる」というのが目標になる。来年度より次期プラン検討が始まる。「誰もが」というのがこの7年間でどのくらいできてきたのか、振り返る必要がある。体験機会を増やしていることは確実である。資料に掲載のある「障がい者向け鑑賞サポート事業」はまどかぴあが集客に非常に苦勞したと聞いている。次年度以降、次のプランを考えるにあたり、「誰もが」「誰も」というのは誰をさすのか、どういう領域のことをやっていくといいのか議論していくといい。

### 糸山委員

ピープルアートパフォーマンス(福岡県立ももち文化センターで実施しているホール事業)といって、障がいのある方が参加・出演する事業がある。必ず字幕や手話通訳をいれているが、それを必要とされている層の来場が少ない。来場者を増やすため、ももち文化センターのある早良区にある聴覚特別支援学校と付き合いだしている。特別支援学校は、今年度10月には早良市民センター第2回人権講座の中で手話劇を演じている。来場する方はもともとそういうものに心寄せるかたではあるが、聾文化がなくならないようにするためにという劇で、皆さん感動して泣かれた。そういうお付き合いをしても、ピープルアートパフォーマンスには来てくれていない。公募して、お付き合いも深いのに来ない。基礎自治体の施設ではないからということもあるだろうが。文化施設にくるハードルが健常の子どもでも高いし、聴覚障がいの場合は家族が頻りに文化施設にいかないと、来ないだろう。文化施設に来るハードルが健常の2倍程高い。手話通訳はかなりお金がかかる。費用対効果とかいわれるとできなくなる。費用対効果ということは一切言わずに実施しているし、費用対効果の話は県からまだない。ないからやれている。その内、手話通訳が必要な人が来てもらわないと、費用対効果について言われるとつらいと思っている。どこと一緒にどうやればいいのか教えてほしい。基礎自治体だと教育委員会との距離が近く、市役所の中での連携が深いと思う。その辺をぜひ大野城市で突破口をひらいていただけるといいなと思う。「ここがハードルで文化施設にこない」というのを私も知りたい。成功事例が伝播していくと思う。ピープルアートパフォーマンスはすでに丸6年やっている。いまだにその状態である。これが広まるには厳しいところがある、一方では国単位でみると前はそういう案件がほぼなかった。日本全体の問題だと思う。

### 松永委員

知らせるという意味でインスタに挑戦されて、画期的だと思う。学校と手をとっての、子どもや保護者へのイベントお知らせの呼びかけは、今まではチラシを配っていたが、昨年度から全ての世帯に「テトル」というアプリを登録してもらって、臨時のお知らせ等はメールで行っている。今年度全部テトルに変わった。各学校ではなく教育委員会から一斉にメールが送られる。それを利用すると、ランドセルクラブのお知らせとか全世帯に知らせたいイベントやチラシはPDFにして親に送ることができる。教育委員会と連携して、そういう周知の仕方があるのではないかと。とても簡単にできる。そういうのも活用してはいいか。

### 中嶋委員

テトルは全員ではないのではないかと。

### 松永委員

全員である。入学説明会のときにアプリをいれてもらうようお願いしている。臨時のお知らせは保護者に対し、教育委員会がお知らせしている。そうすると、目に触れる機会も多いのではないかと。

### 事務局

所管は学校・地域連携課である。周知には一定の基準があると聞いている。全部は流せない。ルールはあるが、連携しながら活用したい。紙媒体で配っても、保護者の手元に届かないケースもある。メールは保護者にいくから、確実に保護者に伝わる面がいいと思う。

3育てよう(育成・養成)

[資料2]令和7年度実施予定内容について

[補足資料4]ツナグトレポーター養成講座について

[補足資料7]サイトを中心とした担い手と受け手をつなぐネットワークの構築

### 事務局

事務局の説明の後、質疑。

【質疑・意見】

### 長津委員

最後の箇所について、詳細な説明を依頼する。

### 事務局

それぞれの事業が、サイトをハブにして連携してつながっていきたくて考えている。そのような目的をもって、様々な事業に取り組んでいる。単体ではなく、それぞれが連携をもち、つながる仕掛けを作りたい。様々な事業が、実際に本格的に動き出す中で、一過性ではなく、関わっている人が多く増え、他の事業に参加したりと、つながりができた。今後は、その幅をさらに広げ、ツナグに登録した方など幅広い交流につなげていきたい。また、相談などを個々に聞くこともあるが、それも限定的である。また、本当に情報を欲している人に届いていないのではないかと感じることもある。より必要な人に届くような仕組みを考えたい。登録者の数も増えているが、活動の様子を上手く届けられていない面もあると思う。アーティストとコンタクトをとったり、どういった活動ができるかを私たちも知りたい。また、前回の審議会で「ツナグ利用者アンケートをとってはどうか」の声をいただいた。まだ実施できていないが、次年度は、広く利用者アンケートの実施や、交流会にて登録アーティストに対し、声を聴きたいと思っている。そのためのきっかけづくりとして、今年度はメールで登録アーティストに情報発信

をするということからコンタクトを取り始めている。

#### 長津委員

繋がりが増えているのは、企画に関わっているのだからわかる。それは10人くらいの話。おっしゃっているようにもっと広がるといい。登録アーティストが各事業に参加できるようになるとよりよい。ツナグトの登録のアーティストは文化連盟とはちょっと機能が異なる、大野城の文化を支えるインフラになりつつあると思う。そういうふうに展開していくといい。個人の集合体になるといい。文化連盟の方たちがこのサイクルにもっと関わるといいなと思った。

#### 松永委員

子ども達にいろんな体験を、ということで考えてくれていてありがたい。ランドセルクラブの長期休みは、子どもを預かる時間が多くなる。支援員もあの手この手で飽きさせないように長い時間見守るのは大変である。そのため、夏休みに木工体験、藍染体験とかさせてもらおうと喜ぶと思う。ランドセルクラブのコーディネーターと連携して、未来を支えていく子供たちに体験の機会をと考えるのなら、機会を欲しているのではないか。連携をしてはいいかがか。

#### 事務局

昨年度、事業で協力いただいてから、ランドセルクラブのコーディネーターとやりとりできるようになり、ランドセルクラブでも登録アーティストの活用を進めてもらっている。また、ランドセルクラブからツナグト登録の声掛けをしてもらったりしている。引き続き、連携は図りたい。

#### 小林委員

ランドセルクラブの所管はどこか。

#### 事務局

学校・地域連携課である。

#### 小林委員

私の絵画教室に筑紫野市の小学校の先生が見学にみえた。とても熱心で、指導の中でヒントがあればと来たそうである。個人的に勉強されているのだなと思った。子どもに関する教育・芸術は先生方の個々の意識を上げていく必要もあるのではと思う。知的障がいを持つお子さんがスマホで、インスタを見て、「これ行きたい」と言ったらしく、アーティストのイベントに行ったらいい。インスタってすごいなと改めて思った。親の

意識も高いのだろう。なにかしら体験してみると楽しい感情は残る。とても印象深い体験になるだろう。「誰もが」というのは難しいが、ピンポイントで響くようなものは提供し続けることは大事だろう。

#### 糸山委員

地元の演出家、俳優の中でランドセルクラブのような学童で先生としてやっている人がいる。なぜそんな仕事を始めたかを聞いたら、長期休み中の学童でやるのがなく、「何か考えて」と言われるらしい。遊びのワークショップを行っていると言っている。子どもは、身近な人に興味をもち、演劇をやっている大人がいると認識する。全員ではないだろうが、そういう場所でアーティストが活用されると、アーティストも仕事になる。それからいくと、活躍の場があれば、お互い良い。アーティストの仕事という面も意識してもらえると、可能性が広がる。現実、アーティスト活動と仕事の兼業は難しい。自治体側も意識してもらえると支援側も助かる。

#### 事務局

担い手の育成事業の中で、アーティストとよく話すのはやはり本業と時間の兼ね合いが難しいということである。子ども相手は特に難しいようである。子どもの注意を惹きつける、飽きさせない仕掛けや、単純な言葉で短く伝えるとか、工夫が必要。「子ども向けにできるなら、全員にできる」と聞く。その辺は難しいと思う。どういう風につながったらいいかわからないアーティストが多いので、つなげてあげたいと思う。伴奏しながら打ち合わせに入るとか、丁寧な支援が担い手育成にあたり効果的であるし、大野城市でやりたいなと思ってくれることにつながっていくと考えている。

#### 小林委員

アーティストを上手く取り込んで、そういう団体を使ってあげると何かと使えるのではないか。アーティストは生活に困っていることも多いから、演劇などに関わるお仕事、自己表現を生かせる職場はありがたい。ランドセルクラブで資格はいるか。

#### 永野委員

主任や補佐の方は資格をもっている。アルバイトで学生も来ている。長期休みでは、学生と大学生が参加することも多い。どのような方でも募集している。ランドセルクラブでは、通常の活動とは別に、芸術鑑賞枠というのがあり、謝金をお支払いできる枠がある。演劇をやっている方等に学校・地域連携課に声をかけて、来ていただくとありがたい。

#### 小林委員

以前は、1,000 円くらいだった。

#### 永野委員

通常の活動では、実費弁償費として、1回800円お支払いしている。芸術鑑賞枠での長期での実施の場合、講師料をお支払いしている。

#### 齋藤委員

800円は生徒1人あたりか。

#### 永野委員

そうではない。45分あたりで体験活動を組んでいる。ボランティアとして交通費程度の謝礼で800円ということである。

#### 齋藤委員

そのお金はどこから出るのか。

#### 永野委員

市からの補助金で、実費弁償費を各学校からいただいている。ほぼボランティアで来てもらっている。

#### 中嶋委員

文化連盟もワークショップをやっているが、やはりアーティストが見つからない。子ども相手が難しい。子どもに向けてできないというアーティストも多い。謝礼も多く出せない。いろんな問題があって、半ボランティア。増やしたいが限度がある。文化連盟の方はツナグトに登録されているか。

#### 事務局

文化連盟のアーティストもツナグトに登録してもらっている。現在、文化連盟も併せて95人/団体。

#### 中嶋委員

他の団体にもいろいろ声かけてした方がいいと思ったのが、MONO 創り Lab。お声がけしたらできるのかなと今思った。ツナグトへの登録にお声がけしたらどうか。

#### 齋藤委員

先程のボランティアの話だが、ボランティアで困っている芸術家が多い。ボランティアという聞こえはいいが、その流れを止めなくてはいけない。ボランティアに甘えてし

まうのが日本の文化。いいこととされているのは間違いだと思う。謝礼を払い、文化振興を目指すべき。私はアーティストがボランティアとして技術を提供することに嫌悪感を抱いている。文化を衰退させる元である。

#### 事務局

ランドセルクラブについては、芸術鑑賞枠の場合は、謝礼は払われている。他の活動は子どもの見守り、体験活動ということで、趣旨が異なっている。それぞれ、芸術文化など、専門的なものについては、予算を確保し、謝金をお支払いしている。一概に、ボランティアと言うことではない。去年、私が見学に行った、能楽体験はきちんと時間と予算はとっていた。ランドセルクラブについては、そのように整理されているようである。一方で、齋藤委員がおっしゃっていることも確かであり、考えていけないといけない点ではある。

#### 小林委員

かなり前だが、ランドセルクラブでお茶の体験に行った先生が、「謝礼が1,000円」と言っていた。当時は、材料費も込みだと言っていた。準備や材料は安い物じゃできないということで苦言を呈されていた。準備等で時間をとって、齋藤さんが言われたように体だけでできることはない。やっぱり有償とはいえ、少ないと感じる。

#### 永野委員

今は、材料費支払っている。しかし、材料を作る手間賃はだせない。ちょっと昔とは変わっているかもしれない。

#### 齋藤委員

モノに対してお金はさすが心にはだせないという印象がある。

#### 永野委員

補助金で運営しているので、手間賃や技術面は別になる。ご相談して、可能な方に来ていただいている。今度、キャンドルの講師に来てもらうが、材料費と800円のお支払いでいいという人に来てもらっている。地域の方とつながるということで、PDCA活動でやっている事業である。

#### 糸山委員

難しいことである。私のNPOでは謝金規定はあるが、舞台技術者は一日3万円になっているため、それに少しでも近づくように2万円台。アシスタントはその半分など、細かく規定している。1個のワークショップに数十万かかる。それを確保する仕組

みはおっしゃる通り難しいと思う。うちはアーティスト支援がベースになっているから必死になって払う。現実、そうでない活用の仕方だと考え方のベースが異なるので、そうなるのだろう。悩ましい。支援側の考え方だと、「逆にうちで稼いで、表現活動は続けてね」という考え。このような考えは、他にはあまりない。ももち文化センターが人材育成を目標としていて、アーティスト支援のNPOが指定管理をしているからだろう。お金を集められる仕組みは他の団体にはあまりない。広げていきたいと考えている。アーティストにお金を払うことを定着させ、その先に教育現場、他の現場でも払うことが定着してほしい。しかし、まだ定着していないのが現実。日本的ボランティア文化はあるだろう。

休憩(5分)

4つなろう(連携・融合)

[資料2]令和7年度実施予定内容について

[補足資料5]芸術文化に関する職員研修について

**事務局**

事務局の説明の後、質疑。

**【質疑・意見】**

**糸山委員**

補足資料5の職員研修について、「新入社員から部長まで参加した」とあるが、どういう呼びかけをしたら参加されるのか聞きたい。小学校のワークショップの際に、基本先生もワークショップの中に入ってもらうようにしているが、主任の先生に「絶対にワークショップに参加したくない」という人がいた。結果その小学校ではワークショップが行われないこととなった。年齢の方がワークショップに参加したくないという事例があったため、部長級まで参加された理由が知りたい。

**事務局**

芸術文化の職員研修会として職員掲示板で周知した。その内容は「芸術文化は趣味の一つとして捉えがちであるが、その過程に注目して、人とのかかわり方、関係構築などに関係する。芸術文化の考え方が地域課題の解決やコミュニケーションの構築にもつながるので、価値を知ってもらいたいからぜひ参加しませんか」と、文言はシンプルである。役職には制限を設けず、各部から1、2人と指定した。課長や部長の役職まで参加されるのは意外だった。皆さんに参加してもらい、驚きながらも楽しんでもらったと思う。

**事務局**

少し補足をする。職員向けに様々な研修がある。基本的に「部局から何名」と指定する。ある意味半強制的である。開催日の業務の都合で、部長に参加してもらった場合もある。ただ、今回の研修は、他の研修とは毛色がちがうものであった。職員間コミュニケーションを図るという意図もあった。参加してもらった職員が普段の業務とは違う空間で、普段とは異なる体の使い方、新しい発見などがあり、効果的だった。

**齋藤委員**

ワークショップの内容を聞きたい。

**事務局**

前半は演劇ワークショップを体験し、後半は長津委員よりワークショップを踏まえて、活用例を中心に話してもらおうという構成。前半は、ペンを使わないもの、体を使うもの、グループなどで対話をしながら楽しめるワークショップにしてほしいとお願いした。しかし、一般的な市民向けワークショップと異なることは、講師が、要所所で、プログラム中で気を付けていること、考えていることなど意図を話したところである。例えば、ワークショップネームつけるというワークで、ワークショップネームを決める理由は明かさないとと思うが、今回は名前を付ける意図を話してもらった。後半は長津先生から、ワークショップを受けての心の変化の共有や、グループごとに業務や生活に活かせるものはあるかについて話をしてもらった。

**長津委員**

他自治体では実施していない。ぜひ職員研修は継続してほしい。その上で、補足資料5の最後に記載のある「連携会議の在り方を考える必要がある」という文言について、最初は活発に議論があったが今は形骸化している。見直しをもう少し伺いたい。というのも、次期プランについて各課に根回しながらやるプロセスが始まると思うが、各課から一人来てください、とやるのがよいのか、職員研修で行ったワークショップの雰囲気を生かすのがいいのか、考えるべきポイントである。次年度以降、各課との連携について、どう考えているか知りたい。

**事務局**

具体的には決めることができていない。来年から計画の方向性を考えるので、連携会議のあり方を再考する必要がある。連携会議に参加する課は固定する必要がないとも考えている。当初は芸術文化に関わる事業を実施している部署をピックアップしていたが、長津委員が言ったように、改めて各課から来てもらうか、今回の職員研修のように、全部署対象とするのか、両方するのか、などは検討したい。

#### 長津委員

ぜひ、やらされ感がない、いい雰囲気になる方向でやってほしい。話は戻るが、4-(2)-1 まごころアート展覧会は、ロビーでの実施なので、反応の把握は難しいだろうが、手ごたえを聞きたい。個人的にどういう効果があるか知りたいと思う。鑑賞した方、市内の事業所や商工会など協力して下さった方の反応を聞きたい。

#### 事務局

この事業は、ふるさと館のジョーホールで実施したため、職員は常駐していないが、来ていただいた数人からお話を聞いた。絵の魅力を話していたり、知人の絵が展示されていることへの喜びなどを話しており、知っていただくきっかけになったと考えている。そこからレンタルにつながるか否かは、すぐには分からないが、大野城市内で登録している人もいるので、大野城のコーナーで紹介できたのはよかったと思う。影響がはかりづらいのが課題。ちなみに、自分の作品が展示されていた方は自分の作品展示に喜びをもたれていた。協力関係についてだが、まごころアートは店舗等でのレンタルも可能なため、商工会に声掛けしやすかった。企業との連携という目標について、取組の検討が難しい部分もあるが、まずは、このような取組を知ってもらいきっかけになればと思い実行した。

#### 事務局

補足をする。子どもの絵が展示されているという保護者の方からの問い合わせがあった。そこで思ったのは、飾られることにより、作家自身が、外に出る機会になる、自己肯定感につながるということである。本来の目的とはずれるが、外に出るきっかけにつながっている。

#### 5活かそう(資源活用)

[資料2]令和7年度実施予定内容について

[補足資料6]

#### 事務局

事務局の説明の後、質疑。

⇒質疑、意見なし

#### 安河内会長

いいご意見がでた。広報の手段、スマホでの発信であったり、「誰もが」鑑賞できる参加できるイベントであったり、そのことについて具体的にどのようにやっていくかということをおさらいしてほしい。

#### 事務局

安河内会長、長津委員からもあったが、次年度以降、芸術文化振興プランの改定作業の時期にあたる。「誰もが」と言う部分について、本来、誰もが自分とのつながりを感じて、何かしらの行動に移ること、また芸術文化活動に携わる方の経済循環などの環境を大野城市単独で用意することは難しいが、提供するものを価値あるものとして受け取っていただき、それに対するフィーが発生しなければ活動自体が続いていけないということは、何十年にもわたって課題となっていることであると思う。「誰も」に感じてもらうことが一番だが、「誰もが」というところをどのようにカテゴライズするかが、次のプランの検討課題。実施にあたり、容易に「解決した」という風にはならない課題ではあると思う。説明資料の中でもあったが、芸術文化は生活と地続きであるということ、生活の中に芸術文化があるということ、一部の人は強く実感しているだろうが、そうでない方が、実際、芸術文化に触れ、無意識に価値を感じている段階から、重要性を自覚してもらうところにまでもっていくのは難しい。次期プランの検討にあたっては、「芸術文化が地続きである、そばにあるんだ」ということ、芸術文化の良さを享受することがもたらす生活の潤いについて、抽象的にはなるが、知ってもらい、感じてもらう計画を考えたい。また、テトルの活用について、芸術文化を通じた子どものよりよい成長につながるものについて、教育委員会と協議をさせてもらいたい。SNS を使ったプッシュ型情報発信をつかんでいただく取組などを積み重ね、繋げながら広めていきたい。

#### 安河内会長

職員研修の際に、盛り上がったのは、普段とは違う空間だからじゃないかという話をしてきた。そのような雰囲気づくり、場づくりは、他の事業でも活用できる。

#### 事務局

おっしゃったとおりである。「面白い」「楽しい」の捉え方は人それぞれ。ターゲットにわかりやすく伝える周知の方法をしなければならないと思う。実際の参加者が「いい体験だった」と思えるものを提供できるように、伝わるようにしていきたい。芸術文化の良さを伝えることは、ある意味「運動」であると思う。市民に伝えていける観点をもちたい。

#### 小林委員

まごころアートは、来場者アンケートは取ったのか。

**事務局**

アンケートの実施を迷ったが、まごころアートはフリースペースでの実施であったため、行わなかった。今後、このような機会がある際は、検討したい。

**小林委員**

フリースペースである場合は、アンケートは実施した方が良いと思う。

**事務局**

了解した。

3その他、閉会

**事務局**

追加ご意見は、意見記入シートに記載いただき、令和8年2月12日の金曜日までに提出、事務局で取りまとめて、委員の方にご確認いただいた上で、HP 等で公表する。審議委員は令和 8 年 6 月 19 日をもって、2年の任期が満了する。来年度はまた状況により改めて選任継続や審議会のご連絡をする。

以上